

第1章・場面2 御稜威ヶ原の広場

研究棟にけたたましい警報が響いた。職員たちが一斉に対策本部室に駆け込み、モニターを凝視した。私はマグカップを机に置き、端末を操作する。

「未確認飛行物体、軌道を変更！大気圏への降下コースに入りました！」

緊急放送の音が響く。モニターに描かれた軌道は、日本列島の真ん中に向かって伸びている。

「.....到着予想地点は、埼玉県北部方面。詳細はまだ絞り込めません！」台風の予報円のように、まだどこに来るのかあいまいなのだ。

だが自分たちのすぐ近くではないか、まさか——みんなが思わず顔を見合わせる。

陸自特殊部隊は直ちに出動を命じられる。着地点はまだ特定できていないが、陸自のレーダー管制で誘導してもらう手筈だ。

私は出動要員に加えられた。情報解析担当として現地に同行する。汗が背中を伝う。冷房が効いた研究棟でさえ熱気がまとわりつくのに、あの炎天下に行くのか。

緊急配備されたエアカーに乗り込み、JAXA本部を後にする。滑らかに浮き上がった機体は、灼熱のアスファルトを瞬く間に置き去りにした。機内の冷房は全力で稼働していたが、それでも外気の五十度超の熱波が外装越しにじりじりと伝わってくる。

埼玉県南部、所沢上空に差し掛かったところで、到着予想地点は熊谷市御稜威ヶ原（みいずがはら）の広場に絞り込まれた。眼下の街並みでは、人々が陽炎の中、建物へと避難していく。

「熊谷といえば、日本一暑い町だったよな.....」隣席の隊員が乾いた笑いを漏らす。

「うちわであおいでも、熱風しか来ませんね」私は苦笑いで頷いた。昔はうちわ祭りで納涼していたそうだが、とっくに過去のものだそう。いまの気象庁の予報だと五十二度。冗談じゃない。

やがて、機体は御稜威ヶ原の広場上空に到着した。隊員たちが次々に飛び出し、広く散開していく。最終的な着陸地点はまだ不明なため、広場全体を警戒線で覆った。私はその後ろに立ち、ビジュアを起動して遠方の空を注視する。やがて、青空の中で

らめく銀白の機体が姿を現し、徐々に高度を下げる。部隊もそれに合わせ包囲を縮めていった。

それは全翼形状を持った流線形の機体だった。音もなく、空気を押しのけるように静かに降下してくる。遠目からでも、特異なデザインだとわかる。——やはり地球のものではないのか。

「全員、警戒せよ！発砲や衝撃に備えよ」

前列の自衛隊員が盾を構え、後列が一斉に小銃を構える。私はその背後から、ビジュアで拡大して観察する。材質は無機的な金属に見えるのに、光の反射は柔らかく揺らいでいる。地球のどの素材とも違うようだった。

やがて機体は広場の中央に着陸した。衝撃も轟音もなく、羽毛が落ちるかのように砂埃ひとつ立たない。

高度な飛行制御が実装されているはずなのに、それを意識させない優雅な着陸。生命を思わせる曲線をもつ優美な外観。私は思わず見とれ——ふと、「もしかして、これは味方なのでは」と直感していた。

数秒の沈黙ののち、機体の側面が音もなく開いた。内部から押し出されるようにして、円筒形のカプセルが地面に着地する。高さ一メートル、直径五十センチ。着陸と同じくらい、無駄のないスムーズな動きだ。

「動きはカプセルのみ。攻撃の兆候なし！」

緊張がわずかに緩む。しかしまだ誰も近づくわけにはいかない。太陽の下で、銀色のカプセルだけが異質に輝いているのを見て、私は背中に冷たい汗を感じた。これは人類史を変える瞬間かもしれない。

その後、慎重な手順でカプセルは収容された。ロボットアームが伸び、多重の防護ケースに収められる。機体本体も別のコンテナに封じられ、トレーラーで搬送される。

「東京へ送る。JAXAの管轄だ」司令官の声が響く。

私は再び同行を命じられ、エアカーに乗り込んだ。窓の外では、熊谷の人々が遠巻きに見守っている。熱波の中、誰も声を発せず、ビジュア越しにその光景を観ている。きっと数分以内に世界中に共有されるだろう。

帰路、私はシートに背を預けた。ふうと、小さく息が漏れ、張りつめていた神経が緩んでいく。さっきの直感を思い出す。

「.....確かめたい」

不安もあるが、科学者として謎を解明したい思いが膨らんでいくのが、自分でわかる。

けれど、状況は不明なことだらけだ。地球に降り立った「それ」が希望なのか破滅なのか——まだ誰にもわからなかった。